娘・母関係の物語（四）

山田英美

第二部

はじめに
第一話　ナナの事例
第二話　ミミの事例
第三話　ノノの事例
事例と「イグアナの娘」をめぐって

はじめに

この小論は、最初に「娘・母関係の物語」の構想をたてた際には予定になかった部分である。第一部は身延山大学仏教学部紀要に同題（一）（二）（三）として発表した（文献1～3）。そして身延山大学東洋文化研究所の「所報第十三号」に所収の「娘・母関係のタイプと依存・自立の問題」（文献4）が、いわば設計図面上三階建て「物語」の、二階に相当するものであり、本論はその中二階の小部屋といったものであるが、形の上から第二部とした。

ずっと以前に、萩尾望都著「イグアナの娘」（文献5）を読んだときには衝撃を受けた。マンガだといって軽く扱うのはもってのほか、巧みな絵によって、ねらった内容の表現が二倍にも三倍にもなって読者の胸に届く力を持っている、文学作品と評されるもので

ある。作品のテーマは『母の娘に対する心理的虐待およびネグレクト（人権無視的拒否）型虐待と、娘にとってはその関係性呪縛からの生涯かけてのたたかい』である。

白雪姫、ヘンゼルとグレーテル、シンデレラなどよく知られているグリム童話やアンデルセン童話をはじめ、各国に伝わる昔話に、実母による娘虐待の話がたくさんあるが、子どもに語るには刺激が強すぎるというので、継母や魔女としてカムフラージュされていることが多い。しかし実母だからこその重い葛藤や悩みがあり、母親の側にも娘の側にも深刻な影を落とすのである。

本論は、筆者がスクール・カウンセリングなどで実際に出会った事例を通して娘の不安や悲しみ、母の悩み苦しみと相互のねじくれた愛の形を、前掲した萩尾望都の「イグアナの娘」を照合しながら考察を試みようとするものである。

第一話　ナナの事例

母「どうしてもあの子と手がつなげないのです…」

母「あるとき、下の子二人とナナが私の背中に寄りかかっていて、私の前に手を出していたので、その手をなでていたのです、てっきり下の子の手だと思って。ふと、それがナナの手だとわかった途端にぞ〜っとして、思わず放してしまいました。」

ものすごい告白であるにもかかわらず、美しいといえる細面のとのったその人の顔は、わずかも歪むでもなく、他人事のようにすらすらと述べられるのに、なんとなく奇異な感じを与えられた。しかし、両眼がやや斜視ぎみに動くのが、落ち着きのある上品な表情の完璧さのバランスを崩すものとして、この人の内面の苦しさを精一杯表出しているように思えた。

母「出産の時、難産で、『痛みどめなしでも我慢できますか?』と医者に聞かれ、ハイと返事したのですが、生まれた瞬間、（赤ちゃんが）真っ黒なシルエットで小悪魔のように思えて―。(注①) 二日間意識が朦朧として、赤ちゃんを見なかったんです。ベッドで気がついて

『わたし、何しに入院しているのだろう?』って。そして

『あ、そうだ、赤ちゃん産んだんだ』って。十六キロ太って退院しました。」

母「ナナが最近よく熱を出すのです（三七度八分くらい）。そして幼児のような『ひぃーっ』というものすごい泣き方をする、『ひぃーっ』って。駄々っ子のようで、いっぱい単語を並べるけど、ちゃんとした言葉になってなくてさっぱりわからないので、『あんた、けっきょく何が言いたいのよ!』ということになってしまうんです。」

ナナ＝六年生の三学期。『頭がものすごく痒いのが気になる』ので、クリニックで診てもらったところ、ドクターから心理的なもの

ではないか、と言われて、担任に付き添われてスクール・カウンセラーのところに来た（途中で担任は席をはずす）。母も相談したいといっているとの情報もあった。（〈　〉はカウンセラー）

〈どういうときにとくに頭が痒い？〉

ナナ「学校にいるときよりも家にいるときのほうがかゆいと感じる。〈そういう時は〉かきむしったり、じっと我慢していたりするけど、意識すれば、気になる。」

〈お母さんが相談面接を希望していることは〉

ナナ「知っている。そうしてくれるとよいと思う。〈妹たちは〉下の妹はかわいい。真ん中の妹とはケンカをよくする。〈友だちは〉仲良しの友だち二人が私立のE中学に進学が決まり、さびしい。〈あなたもいっしょにE中に行きたかった？〉わたしも、もっとアタマがよかったら行きたかったけど…。（実際には成績はクラスで上位）

〈男の子は？〉

ナナ「普通に話す子はいるけど、一人だけ、一人でまだよかったんだけど、わたしの口の周りが黒いことをあざけって言った（ぽろぽろと涙がこぼれる）。」（注④）

ナナは痩せぎすで表情も硬かったが、たずねられたことに関しては素直にきちんとわかりやすく説明し、知的な問題などはまったく感じられないが、自己評価が低く、自己イメージも悪い。

この面接の一週間後に母親の来室があり、第一話冒頭のような訴えがあったものである。

娘、母の面接があってから後、偶然廊下でナナに会ったりすると、にこっとしてあいさつをし、表情が柔らかくなったと感じた。担任の先生にも『わたしのテストの出来はどうだった？』などと聞きにきたり、『先生、年齢を聞かれたら〝永遠の三十歳〟って言いなさいね』と冗談を言ったりするという。話し好きで、話し方も上手だと思うと言う担任のナナ像と、母親が語る家庭での彼女のそれとはずいぶん食い違うものがある。退行（赤ちゃん帰り）して母に訴えているものを、母はわからないし、わかろうとできない悲劇がある。

二週間後に父母がそろって来室された。

〈父母からみてどんな子？〉

母（マスクを着用）「何をするにもすんなりできない、皆でいっしょに出かけるときにも『待って、まって』と時をわきまえず、マンガ本などを際限なく読んでぐずぐずと待たせたりして、わたしもつい『おまえ、怒ってほしいの？』と言ってしまう。これだけはしてほしくないと思うことをピンポイントでやって、わたしの神経を逆なでするのです。主人も二番目の女の子が生まれたときには、この子はかわいいねぇと言って抱き上げていた。（注②）二番目の子は、箪笥の中もきちーとしていて、つい比較して長女を叱ることが多いです。登校班の責任がある立場でも、放っておけばあれ忘れたこれ忘れたと遅刻し、妹のほうが待つくらい。（注③）

父（単身赴任で帰宅中）「ふしぎなのは、隣で呼んでいても聞いてない、見てない。協調性がないです。『どうせわたしなんか叱ら

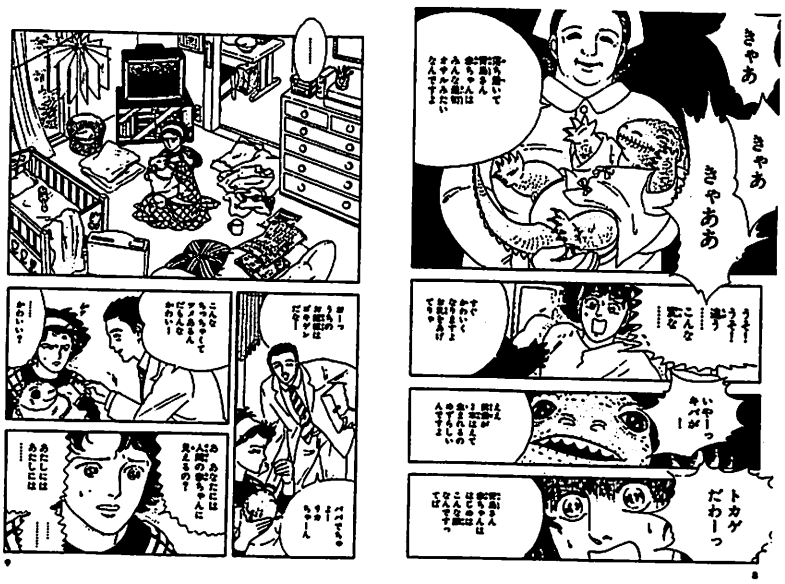
れるんだから」とか、自分ができないという先入観が強いようです。私自身も経験があるのだが、三年生のころ父から左利きを厳しく矯正させられた。ナナの場合も効き手を二回ほど変えている。そんなことも影響しているかもしれない。時々大人っぽい顔つきをすることがあるときには、そろそろ大人として扱わないといけないな、と思うことがあります。後一年くらいの間にうけとめて伸ばしてあげないと。」

ナナが卒業してからも母親の面接は続けることになっていたが、ついつい後回しになってまだ実現していない。娘が思春期にさしかかる五、六年生のころには、幼児期の問題に再度取り組むために、母親との衝突が沸騰する。世に言う第二反抗期である。したがって親の側のやりきれない焦りがあって、面接にも積極的になられ、第三者の介入が結果として親子の緊張を緩めることになる場合が多い。筆者はナナの娘・母関係にふれたときに即座に「イグアナの娘」を想起していた。イメージが重なるページを次に引用してみたい。

〈注①〉

原作では、むかしガラパゴス島のイグアナ姫が、人間の王子様に恋してしまい、魔法使いに人間の娘に変えてもらった…という伏線がある。リカと名づけられた女の子を産んだとき、母ゆり子は自分の（前世の？）素性を記憶からすっかり消してしまっているのだが、そこには拭い去りきれない、DNAのようなものがあり、イグアナに見える長女を最初から受け入れられない。ナナの母もその昔…というわけではないだろうが、いずれも娘によって母性が開かれていかない出会いであった。かわいいと思えないので、最低の世話はするが子どもは敏感にそのちぐはぐを感じ取って、ますます世話を焼かせる行動に出る。

萩尾望都「イグアナの娘」〈注①〉



〈注②〉

母はもう赤ちゃんなんてこりごりというのでなく、今度こそかわいがれるかわいい子を！と切に願うようである。念願かなうと、母の愛は二番目の娘に集中し、長女は何をしても母の気に入らず、ますます疎まれるようになる。

〈注②〉

ほーら ちゃんと 抱いてー
こんなのじゃ なくて
ほーら ちゃんと 抱いてー
マミちゃん だー
うれしい——
マミー マミー
ちがう ちがう
ちゃんと 抱いてー
ちゃんと 抱いてー
ちゃんと 抱いてー

第二話　ミミの事例

ミミ＝六年生の一学期～二学期。一学期中の彼女の顔貌は長い前髪が顔の半分を覆い隠しており、ゲゲゲの鬼太郎のような一眼の鋭い目付きで見据えるとかなり迫力があるという風評があった。学校の備品や消耗品のたぐいの小さなものをくすねてクラスの手下のような子らに与えたりし、それを知っていて悪いことと思う友だちも、仕返しを恐れて口にできない。学級の役員などは自ら買って出て目立つことを好むが、きちんと役割を遂行するというレベルではない、これらはミミのこころの不満のあらわれだと担任は見ていた。

二学期になってからしばしば保健室を訪れ、養護教諭に甘えてわがままな行動をとるので、養護教諭も扱いに苦慮しているとのことであった。休み時間はもとより、とくに国語や算数の時間になると、プリントなどを携えて、さっと保健室へ移動してくる。その際には最低限担任教師の許可を得てくるが、保健室は彼女にとって治外法権の場所であり、さっさとプリントをやり終えるとソファなどに寝そべってマンガ本を開いたりし始めるので、養護教諭は「いまは休み時間ではありません。プリントが終わったら、机で漢字書き取りでもしなさい。」といった注意を与え、ミミはそう言われると、一応従うといった過ごし方であった。時には保健室の教師といっしょに〝○○探し〟というようなゲームをしたり、「昨日は放課後どこに行ったの？」というような会話を交わしたりという場面があったりして、ミミにとっては癒しの場であろうが、学校側としてはミミに同調して保健室へ遊びに入り浸る同級生が増えて困るといったことも発生していた。

二学期になってから、ミミの母親が面接に来られた。

母「ミミはここ一、二週間ほどは家でも落ち着いている。子育ての悩みをひとに言うなんてことは恥ずかしくてできなかったが、思い余って会社の先輩などに話したら、いろいろよいアドバイスをいただいて、自分もいっぱいいっぱいになっていた状態から少しゆとりができたように思えます。児童自立支援施設（旧教護院）へ入所させようかと本気で考えて、先日担任の先生にそのことを話したのですが、『それはどうでしょう、スクール・カウンセラーに相談してみてください。』と言われたので。」と来室の意図を話された。

母「友だちに言われて〝一日一回は抱きしめて触れてあげること〟に努めようとしている。まっすぐ育ってもらいたいという思いが強くて、守れもしない時間に門限を決めたり厳しく制限をしては、約束を破ったといって叱る、頭から押さえつけるという毎日だったことも、先輩に指摘されました。」

母「実はわたしは幼いころに母に死なれて、父に育てられました。長女として母代わりに弟たちの面倒も見たし、しっかりしていた。そういう自分に比較してミミを頼りなく不満に思ってしまうことが

多かったと思う。七人の子どもを産んで、ミミは五番目。はじめての子育ての悩みにぶつかった。四歳下の妹が超未熟児で手がかかったので、ミミは嫉妬することが多かったと思います。」

母「先日『お母さんはわたしを頼ってくれない』とミミに言われたことや、『わたしは、生まれてこなかったほうがよかったのかなー』とつぶやくのを聞いて（涙）、これはこたえました。」

ミミの母は、自分も愛情不足で育ったこと、自分が母親にしてもらったやさしい扱いの体験が不足していたことに思い至っている。現在は事情で自分ひとりで子どもを育てていることもあり、まさに一人でしゃかりきに父親をやっていた、と述懐された。

この母はこの時点ですでに、ミミを施設に入れては彼女が態度を矯正して優しい子になるどころか、母に捨てられたという思いしか抱かないだろうということを、しっかりと洞察している。また子どもに対して、〝決して言ってはいけない一言〟を言ってしまっていることの償いをしなければ、という厳しい眼を自分にむけている。この母に対しては、カウンセラーは「ご自分を責めすぎないで。」というにとどめた。

その後ミミに保健室で会ったとき、すっかり別人かと思った。顔半分を覆っていた前髪をかわいいピンで頭頂に留め、全貌を現していた。初めて見る顔のようだった。想像していたよりずっと平凡な眼をした、どこにでもいるおてんばで元気な小学生だった。先生たちもこぞって、髪をあげているほうがかわいいよなどと、声をかけていた。動作も機敏で、短距離走の選手になるくらい足も速い。できることを正当に認められ、〝自分の居場所〟を探し当てることによるある種の落ち着きが見られている。ただしそれはまだ危うい感じがぬぐえない。澱のようにたまっている根深い不信感、『私は生まれてこないほうがよかったの？』という関係性における存在の不安感やコンプレックスをどうやって篩にかけ、母との関係を改善できるか、道はけわしい。

第三話　ノノの事例

ノノ＝一年生一学期。入学当初より母からの分離抵抗をはげしく示していた。

ノノ「ママがいいの！だっこしてほしいの！」

無理やり引き離すと、三十分から一時間ほど大声で叫んで泣きつづけ、激しく足を踏み鳴らす。担任はいろいろ試みていたが、日を追って増幅し繰り返されている状態に、授業の邪魔にもなるというのでついに六月にはいってからスクール・カウンセラーに相談があった。母親の言では一時はストレス性弱視と診断された心身症の発症もあった。

六月下旬のある日、母親が車で送ってくる場面から観察した。前日から母親が一定時間教室にいるという状況が作られていて、当日は一校時だけという約束（母が決めた）だった。いつも二歳の妹（A）

を同伴している。教室の後ろでAが母のひざにまとわりつき、絵本を読んでもらったりしている様子を、何度も何度も振り返って見ていたが、時間が迫ってくるとノノは顔をゆがめて腹痛を訴え、母の引止め策に出る。そして母は押しまくられてずるずると午前中教室にいることになってしまう。

ノノは小柄できゃしゃな体つきだが、決して気が弱いわけではない。むしろ、言いたいことをはっきり言って駄々をこねて周りを支配する様子である。ノノの気がかりは、自分が学校にいる間に妹のAが母を独占し、自分から母を完全に奪ってしまうことである。であれば、妹が母にべったりしている様子を、これでもかこれでもかと見せつける状況は好ましくない。ノノのために教室にいてやるのであれば、妹は何とかしてつれてこない工夫をしてほしいことを担任から話してもらう。ノノの所かまわずの「だっこ！」の要求に母は応えてはいるが、怒りを内に含みながらポーズをとっている感じがあるので、ノノは真にホールドされている実感があるかどうか。

母は、ノノが登校に抵抗するのは、学級で何かいやなことがあるせいだと思いたい。「教室でどんなイヤなことがあったの？」と問い詰めて毎日のように犯人探しをしていたらしい。そう言われるとノノは、はなから登校がおもしろくないのだから、「あれがいや、これがいや」といろいろ言う。学級に同席してみて、母は「これだ！」と思ったという。『朝の会』の雰囲気が悪い！「朝の会が終わる時間から登校する？」などと言ったりなだめすかして今日に至ったという。

次の時も最初にクラスでの様子を観察し、三十分休み時間に別室で母と面談する。ノノもついてきて、ちょっと離れたところで行儀よくノートに字などを書いている。

母「四歳下の妹が生まれたときから『だっこ、だっこ』と言いつつ、右といえば左と反抗的で。自分はきちっとしたい性格で、ノノがわがままを言っても怒らずにいても、それでも反発されるとカチンときて…。そんな時、ストレス性の弱視と医者にいわれた。「やっぱり、わたしだな。」と。ノノが学校に来たがらないのは、学級での何かがイヤというのではないのですね。」

ノノにインタビューする。

〈お家でいちばん好きなのは？〉

ノノ「ママ」〈その次は？〉

ノノ「パパ」〈その次は？〉

ノノ「A（妹の名前）」〈その次は？〉

ノノ「もういない」〈犬とか猫とかはいない？〉

ノノ「犬がいる」〈犬の名前はなんていうの？〉

ノノ、首をひねって無言。興味ないらしい。

〈どんな遊びが好き？〉

ノノ「かくれんぼう！（即座に答える。）かくれて見つけてもらうの、すき。おうちでパパとAなんかとする。Aはすぐ出てきちゃうの。」

きました！典型的な『いないいない・ばあ』ではないですか。妹誕生を契機として、以来ノノの取り組んでいるのは分離不安であり、小学校入学という決定的な事態になって、愛着対象喪失の危機に直面しているということが、ノノの語ることから明白である。

七月中旬、朝の会が終わってから、廊下で泣きべそをかいて母が帰るのに抵抗している。学年主任の先生も加わって緊張した雰囲気である。

ノノ「きのう、がんばったのに、ママはだっこしてくれなかった！」

母「だっこしてあげたじゃない！」ノノは母の〝こころ〟がだっこしてくれなかったことを感じていたのではなかったか。

カウンセラーが「先生にだっこさせて。」と言うと、ノノは一瞬ためらった後、身をあずけてくる。しかし肩に手をかけないで固まったままだった。窓から外の景色をいろいろ見せると、嫌がらないまでも、別世界のことを示されているかのようにキョトンとしている。母との関係をめぐることに関心が一極集中していて、視野が極端に狭くなっているようである。〝ストレス性弱視〟という症状は心理的な視野の狭さの象徴のようで、この子の特徴と思われた。その間に母は逃げるように帰る。ノノは観念したように席に戻った。

二学期に入ってから、ノノは自分で歩いて登校する日も増えている、との担任の報告を受けた。「『先生は、ノノを特別扱いはしないよ』と言い渡し、ノノも承知した。このまま様子を見ることにしたい。ただ、知的には問題がない児だが、『〇〇月生まれのおともだち～　みんな出てきて踊りましょ♪』という遊びをしたときに、ノノが自分の誕生月を知らない様子なのが、妙だと感じた。」と担任の女性教師の言であった。

三学期初め、今では普通にクラスにとけこみ、親しい友だちもできた様子である。入学当初はあんなに苦労だった子が、このように変貌を遂とげたということに、担任はかなり感動しているが、母親はそのことについて特に喜んでいるような表現もしないということに、いささか疑問を感じると、すれ違いざまに担任教師が話してくれた。

三学期の終わり。クラス全体に向けて教師が言ったこともノノに通じるようになった。自分のほうから先生に近づき、おてつだいもとてもよくするようになったとのことである。学級担任の先生がノノの学校での安定した愛着対象として裏切らない存在となった（ちゃんとだっこされている）結果であろうと推察できた。

事例と『イグアナの娘』をめぐって

ここで取り上げた事例の娘たちに共通しているのは、母の愛を奪った妹への嫉妬があり、何とかして母の愛を取り戻そう、あるいは母からもう少しかまってもらいたい願望に突き動かされるように無意識的な知恵をいろいろ働かせる。赤ちゃんを装う退行現象や、医者が〝ストレス性の〟とか〝心理的な〟と診断するような身体が

表現する心身症もその一つである。だが年齢にふさわしくないそういった言動や症状によって、母のイライラや怒りを含んだ不安が増大するといった空回りのなかで、姉娘は三角関係の妹を憎む〈注⑤〉。憎みながら母の気に入られようとして献身的に振舞ったりするが、それも母から拒絶されると、妹をゴツンとやって、いっそう母の不興を買う結果になる。

〈注⑤〉

娘リカは小学高学年の頃、イグアナとして生きていこうと決心する。『まちがって人間の赤ん坊はイグアナの家族のところで入れ替わって生まれてしまった。その赤ちゃんはすぐに死んだわね。だって誰もお乳くれなかったから。イグアナにはおっぱいないし。』と夢想し、出生物語をつくるリカ。『そうだ　あたし　大きくなったらガラパゴス諸島へ行って　私の本当のお父さんとお母さんを探そう』それからのリカは、この想いに支えられて生きる。

リカはその時点で人間の母を抹殺したのだ。母を殺すということは同時に人間の自分をも消してしまうことだった。つまり娘は自分の中に内在化した母とともに生きていく存在なので、それができないということは死を意味するのである。『人間の赤ちゃんは死んだ』というリカの夢想にそれがはっきりと語られている。イグアナには乳房がない。つまり人間の女性として母親としての生き方を放棄しなければならない。リカの中学・高校時代はほとんど省略されているが、浮いた話もなく勉強に明け暮れて一流大学へ入る。そこで彼女は羊に見えるボーイフレンドと出会うが、イグアナである自分が相手を食ってしまう夢を見る。そして自ら身をひいて、イグアナであるがために一生恋愛もできなかったのだということを思い出す。

原作のその後の展開が面白いのだが、ここではおとなになったリカと母の関係、そしてリカが生んだ娘との関係は割愛する。取り上げた事例の少女らが、思春期そこそこの段階にいるのと、一例はまだ幼児期心性時代にいるからである。

視点を子どもを愛せない母のほうに移してみよう。子ども時代のリカと母の関係の中で、母がリカについて否定的なセリフを吐いているものを拾ってみると、

「あの歯の生えた口で　食いつかれそうよ！」

「子供のくせ　リカは声がしゃがれてて　つぶれたトカゲみたいな声ね」

「ぶさいくなくせに　化粧なんて！」

「小学生のくせに　ませちゃって…！」

「リカって…頭いいの…？あのぶすいイグアナが？マミちゃんよりも…？イグアナのくせにまあ…なまいき！」

「二度とイグアナなんていうんじゃありません！！」

リカが母の誕生日にプレゼントした手鏡に対して

「千五百円も！あんたまたムダづかいばかりして！こんなもの買って！ママいらない　お店に返していらっしゃい！」

このように、表面的には人間である母ゆりこの中には、だれにも認識できないレベルでイグアナがいるために、リカを嫌悪しつくすのである。母にとっては、娘は認めたくない自分を映す〝鏡〟であり、娘にとっても母の言葉は自分を映し出し、アイデンティティを作っていく〝鏡〟である。

さて、事例の三人の娘たちはその母とどんな鏡を覗きあっているのだろう。誰かが母たちを支えていかない限り、それぞれの娘・母関係の真相は明らかにならない。彼らの前途は、まだ霧の向こうで混沌としている。

引用文献

1　山田英美「娘・母関係の物語（一）」身延山大学仏教学部紀要　第6号 17-24頁　2006

2　山田英美「娘・母関係の物語（二）」身延山大学仏教学部紀要　第7号 11-21頁　2007

3　山田英美「娘・母関係の物語（三）」身延山大学仏教学部紀要　第8号 31-43頁　2007

4　山田英美「娘・母関係の物語―娘・母関係のパタンと自立の問題」身延山大学東洋文化研究所 所報第十三号　1-19頁　2009

5　萩尾望都「イグアナの娘」小学館　1984

キーワード

心理的虐待　鏡